
はにわさん

湯都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はにわさん

【Nコード】

N5405L

【作者名】

湯都

【あらすじ】

友人から届いた一通の手紙。その内容は何とも名状しがたい恐怖に満ちたものだった。彼の意志通りそれをここに投稿したいと思う。どうか読んでいただきたい。

先日、昔馴染みの友人から一通の手紙が届いた。

簡素な封筒の裏面に綴ってある差出人の名前を見た時、私は驚愕のあまり危うくそれを取り落としかけた。それというのも、その手紙が届いた日というのが、まさにその旧友が失踪したとの一報を故郷の母からもたらされた翌日だったからである。

彼とは竹馬の友だった。国道も通っていないような片田舎でのこと、当然遊び相手に恵まれている訳もなく、近所に二人つきりだった子供の私たちはだから本当の兄弟のように育った。高校までを共に歩み、大学への進学を機に私は郷を出てしまったが、世帯を持った今でも帰郷の折には必ず共に酒を酌み交わした。その彼が失踪したという。

母から聞いたところによると「出張に行ってくる」と妻に告げ、大きな旅行鞆を持って出て行ったきり、もう十日も音沙汰がないらしい。搜索願いも出されているという。彼の人となりはよく解っているつもりだ。昔から変わったところはあったが、家庭を放り出して一週間以上も外をほつき歩くような人間では、断じてない。

——だが、彼の失踪という事実を思う時、私は心が不穏に乱れることを禁じえない。それは私に限ったことではないだろう。恐らく彼の少年時代あるいは生い立ちを知り得る者ならば、その誰もが私と同様の心持になるはずだ。彼自身も手紙の中でその事に触れている。

……ともかくも、大事なことは——そう、手紙だ。謎の失踪を遂げた旧友からなぜか私のもとに手紙が届いたのだ。そして恐ろしきはその内容である。まったくもって何と表現したらよいものか……。今の私には俄に信じられない。しかして彼の気が狂ったともどうしても思われないのである。

さて、とにかくここに警察に提出した手紙の写しがある。彼の意

思通り、それを今からここに掲載したいと思う。読者の皆様に読みやすいよう、さらにはプライバシーの観点から文章、個人名、地名には若干の修正を加えてある。ご了承承願したい。

※※※

お久しぶり。今年の正月以来だからもうずいぶんになるね。君はお元気ですか？

突然の手紙、さぞ驚かれたことでしょう。

実は、こうして手紙を書いたのは外でもない、今僕が抱えているある心配事について君に知ってもらいたかったからなんだ。もっともこの手紙が君の手元に届くころには、それは解決しているかもしれない。もしそうなった時は、この手紙の内容を肴にまた例の店で一杯やろうじゃないか。僕のおごりで、ね。けれども、もし僕が不安が的中してしまった時、そのときはこの手紙をしかるべき場所に提出し、できれば何らかの方法で世間に公表してもらいたい。そういえば、僕の不安が的中した時というのが君にはわからないだろうが、その点については心配いらない。きっと君にも連絡が行くだろうからね。いや、もしかすると今これを読んでいる君はすでにその状況にいるのかもしれない。もしそうなら謝るよ。迷惑をかけてしまったてすまない。

……と、まあこんな大仰なことを書いてしまったが、きっと僕の不安は杞憂に終わるだろう。馬鹿な手紙を出したと、後になっていたく後悔するかもしれないな。

それでは僕の告白を聞いてほしい。

事の発端は実は三十年以上も前のことになる。僕も君も小学二年生だった頃の話だ。忘れもしない。あの蒸し暑い八月のある日、父が妙なものを背負って帰ってきたのだ。

僕の父が戦跡考古学の教授だったことは君も既知のことだろう。近所では誰にも彼にも「先生」で通っていたからね。その父がある戦跡の調査から一週間振りに帰宅した。僕は嬉しくて玄関までこけつまろびつ駈け出して行ったんだけど、そこに佇む父の姿を見た途端、一瞬にして全身が凍りついてしまった。父の背には不気味な、人の形をした何かが負ぶさっていたのだ。

一見、それは本当に人のようだった。いや、外見的特徴を生物学的な見地で鑑みてみれば、それはそっくりそのままヒトであったろう。けれど僕にはそうは思えなかった。幼かった当時には、そのことに合理的な解釈を当て嵌めることはできなかったけれど、今思えばあの時の僕が感じたものは違和感だったと思う。人型のそれには、生物が生物として存在するために、決定的に必要な何かが欠落していたのだ。それは、そう……きつと生気や魂のようなもの、だと思う。君は知人や近い者の亡き骸を目にした時に違和感を感じた事はないだろうか。これは知っているあの人そのものに違いないのだけれど、何かが違う、という感じ。その感覚に似ているかもしれない。それは人の形をしているのにも関わらず、僕の受け取った印象はどこまでいっても“モノ”でしかなかった。

無論、幼い僕は大哭したよ。それをなだめようと近寄ってきた父を見た時には、それこそこの世の終わりのような大恐慌に陥ったね。そして僕はその時、手を差し伸べる父の肩に載った恐ろしいその顔の顔を、間近ではつきりと見てしまった。その顔には目がなかった。眼球だけではない。まつ毛に瞼、眉さえもその顔にはなかった。本来なら目のあるその場所にはぼっかりと真円の穴が開いていたのだ。穴といっても、そこを覗き込んだところでその奥に眼窩が

見えるわけではない。それは異界へ続くような深い闇を宿した、完全なる穴だった。そして異様なのは目だけではなかった。そいつの肌は真っ青な浅葱色で、鼻はあったが鼻孔はなく、口はあったが唇はなかった。加えて、何より不気味だったのは髪と衣服だ。作り物めいた顔面とは対照的に、髪には無闇に艶があつて美しく、おかっぱの少女のように真円の穴の上と肩の上とで切り揃えられていた。そしてそれに呼応するかのように纏っている衣服は緋色の薄い着物だった。その何ともぎくしゃくとした歪な外見がどれほど不気味であるかは、想像すれば君にもわかつてもらえるだろう。そのおぞましき異形が、微動だにせず僕をじっと見つめているのだ。

それから後の事はよく覚えていない。多分なまはげに威喝された子供のように、喚き散らして母の胸に縋りついていたに違いない。いずれにせよ、あの異常時に十歳にも満たない子供にできる事は何一つなかったし、かと言って、父や母に助けを求めることも実質不可能だった。そう、嘆かわしいことに「それ」は父や母の目には映っていなかったのだ。後になってわかることだけれど、父や母だけでなく僕以外のあらゆる人間の目に「それ」は不可視だった。

次の日も「それ」は父の背に乗っかっていた。二日に渡る息子の異様な様子に両親は本気で心配しているようだったし、きつと父は背中に何かがあると言われ続けて気が気でなかったろう。だが、その次の日もそのまた次の日も「それ」は消えなかった。寝間着姿で朝の食卓につく父、弁当を鞆に入れながら革靴をつっかけて出かけていく父、ネクタイを緩めてソファに腰を下ろす父。どの父の背にも着物姿の無機質な「それ」は当然の如く纏わりついていた。

けれども、人間、殊に子供というのは案外気丈夫なものだね。あれほど異常な事態であっても、それが二日三日、二週間三週間、二月三月と経っていくと次第に僕は何とも思わなくなっていくた。非日常も毎日続けばそれが日常になっていくものなのだろう。そうして「それ」は「いて当然のもの」として僕の生活に溶け込んでいっ

ただ。

初めの内、僕は自分にしか見えない「それ」について周囲に訴えていた。けれども、恐怖心が薄らいでいくに従って口に出すことはなくなっていた。本人たちに感知できないことで両親の心配を煽るのは不本意だったし、子供ながらに「父の背中に女のような何かがついている」などと周囲に触れまわるのはまずいと思ったからだ。もっとも、口に出している間もそれを信じる者はいなかったけれどね。実は君にも打ち明けたところがあるんだ。……いや、かと言って君を責めている訳ではないから安心してくれ。僕が君の立場でも十中八九信じなかったはずだから。

それから数カ月が経つころには、僕は「それ」を名前で呼んでいた。呼んでいた、とはいっても無論口に出したことはない。呼ぶことがあるとすれば、それは必ず心の内でだけだった。

それは「はにわさん」という名前だった。名前の由来はごく単純だ。「それ」の顔が社会科の教科書に載っていた埴輪の写真によく似ていたのだ。空洞の目、無機質な鼻や口のつくり、生物味のない陶器のような肌。子供らしく単純でなんのひねりもない名前だけれど、我ながら、その命名はいみじくも「それ」の特徴をうまく言い表していたと思うよ。

そしてその頃には、僕はそれ——はにわさんについて新たな二つの発見をしていた。一つは、はにわさんの手が人間のものと比べて若干長く、その分足が短いという点だ。これは直立している姿を見た事がなかったせいで当初は気付かなかったのだが、よくよく見れば紫色の毒々しい爪が生えたその手は人間のものよりも二〇センチほど長かった。比して、足は着物の裾からわずかに覗いている程度なのだ。二つ目に、はにわさんにはどうしても触れる事が出来なかった。触ろうと手を伸ばすと、指先はいつでもなんの抵抗もなく浅葱色の皮膚を通過した。僕の手だけではなく、はにわさんの体はあらゆる物質を通り抜けてしまうのだった。

はにわさんはそれから全く変わらなかった。動く訳でも話す訳でも、まして消える訳でもなく、ずっと父の背にあり続けた。だが、年が変わって僕が三年生になった初春のある日、突然はにわさんに恐ろしい変化が生じた。――増えたのだ。父の背にだけいたはずのはにわさんが、その日、朝校門に立っている教師の背にすがりついていたのだ。父の背から移動したわけではない。それはすぐにわかった。教師の背にいるはにわさんは父の背にいるものと服装が違っていた。その時はただの小汚い服にしか見えなかったのだが、今思えばあれは炭坑夫か何かの服装だったのだろうと思う。

その日を境に、はにわさんは感染が広がるように急速に増えていった。郵便配達員、商店街の肉屋の主人、小学校の教頭、通学路で毎朝すれ違った散歩中の老人……。なぜかその対象は大人ばかりだったが、はにわさんは人間の背中を棲み家に恐ろしい勢いで増殖していったのだ。今だから言えることだけれど、実は遊びに行ったときに見た君の祖母の背にもはにわさんがいたんだ。こんな事を言うて……どうか気を悪くしないでほしい。

日ごとにかけた先ではにわさんの数が増えていくのは、慣れた僕の目にもひどく気味が悪かった。なにかしら恐ろしい未来を暗示しているようにも思えた。そしてその数ヶ月後、あの事件が起こって僕の不安は現実のものとなる。そう、父の失踪だ。このことについて、僕の本当の経験を話すのはこれが初めてだ。

その日の朝、父はいつものように起床してきた。いつものように寝間着姿のまま食卓について、いつものようにニュースを見ながら朝食をとる。はにわさんの存在さえ省けば、それは何百何千回と繰り返されてきた何の変哲もない朝だった。

その静寂の奥で突然何かが鳴った。初めはほんの小さな、遠くの方で笛が鳴っているような音だった。何だろう、と僕は周囲を見渡す。何もない。けれど音は次第に大きくなっていく。例によって父

と母は気付かない。もう一度辺りを見回す。窓の外を見て、母を見て、父を……とそこで僕は異常に気付いた。父の背にいるのはにわさんの顔が動いていた。口が徐々に開いていくのだ。それに伴って音が大きくなっていった。間違はなく、その音ははにわさんの口から洩れていた。はにわさんの口は人間の顎で開ける可動域を大きく超えてもさらに開いていった。唇の両端が異常に張りつめ、やがて裂け始める。けれど血は流れない。開かれた口の中にあるのは目のそれよりも深く、淀んだ闇だった。頭をのけ反らせ、顔の半分ほどまでが口の状態になってしまったところでようやく停止する。その頃には、音は耳をつんざくばかりの大音声となっていた。体は一切動かないのに、はにわさんの頭だけが上下に大きく痙攣し始める。僕は強く耳を塞いだ。はにわさんの発する音は千匹の怪鳥が一斉に鳴いているようにも聞こえ、また少女が耳元で断末魔を上げているようにも聞こえた。ともかくそれは神経に直接やすりをかけられるような、そんな不快極まりない音だった。

異常だった。何もかもが異常だった。はにわさんの状態や音だけでなく、その異常時の中でいつも通りの生活をしている両親までもが、異常な、狂気の渦の中にいるように思えた。すべてがとにかく恐ろしくて、僕はそのまま逃げるように家を飛び出した。そして、その日父は帰って来なかった。

後から聞いたところによると、父は大学の研究室から便所へと続く、ほんの数メートルの道程の途中で突然消息を絶っていた。父が大学から出るところを目撃した者はおらず、しかも意図的に失踪したのだとは考えられないあらゆる条件が揃っていた。状況だけを見ると、父は廊下の途中で突然煙のように消え去ってしまったのだとしか考えられなかった。

その後のいきさつについては君もよく知っているだろうから、あえて言うまでもないね。君の家族にはずんぶんお世話になったものだ。感謝している。

さて、父の失踪という不本意な形ではにわさんは家の中からいなくなったのだが、その後も他の大人たちに背中にはずっと存在していた。自分が大人になってからも、僕の見る世界の中にはにわさんは必ずいた。そうだ、丁度五年ほど前に突然ぶつりと見えなくなるまで、僕は実に二十年以上もはにわさんを見続けていたのだ。あの程度の年齢を過ぎた頃からは、あれは何だろう、と幾度となく考えた。

まず最初に考えたのは幽霊だった。はにわさんの状態に背後霊という言葉はぴったり当てはまる。さらにその服装を見ると、どれもが過去に存在していた人間が身にまとっていたもののように思われた。一世代前の野暮ったい服装を見ることがあれば、戦時中の国民服やゲートル、もんぺや防空頭巾を被っている姿を見ることがあった。それだけではない。父の背にいたはにわさんの着物はもっと古いだろうし、平安時代のような束帯に袴、烏帽子の姿、さらにはそれより以前と思われる名も知らない衣服を見かけることもあった。そのような観点から鑑みても、はにわさんが幽霊だというのがもつとも妥当な判断のような気がした。けれども、そう、僕には何かしっくりとしないものもあった。自分の周りやメディアで耳にする幽霊の話、もちろんそもそも眉つばではあるが、それらの中の幽霊とはにわさんが一緒だとはどうしても思えなかった。それに幽霊だとしたら突然増殖したことの説明がつかないのではないか。

もしこれが映画や小説の中の話であるならば、はにわさんは人を呪い殺す悪魔のような存在であったかもしれない。恐ろしい姿の異形が背中にとりついているとなれば、とりつかれたものは死ぬ、となりそうなものだ。だが、それにも僕は首肯できない。今までに何百何千というはにわさんを見てきた。はにわさんを背負っている人たちの中には他界する者もいたが、異常死と思われるような死はなかったし、はにわさんによって運命や死期を変えられているという印象も全くもって受けなかった。もちろん父の件に関しては何とも言えないが、あんな状態のはにわさんを見たのは後にも先にもあ

時限りだった。そう、はにわさんはただ「いる」だけなのだ。

詰まる所、はにわさんの正体は何なのか僕にはわからないのだ。いや、冷静に考えれば、はにわさんなど本当はいないというのが一番合理的な解釈なのかもしれない。つまりは僕の気が狂っているということになるのだが。まあ、当事者の僕にはどうしようもできないことだから、その場合については考えないようにしている。

何にせよ、今の僕にはにわさんは見えない。長らく続いた狂った日々は終わりを告げたのだし、今さらその正体を究明する必要もない。……と、少し前まではそう思っていた。だが、最近僕は四六時中ではにわさんのことばかりを考えている。終わってはいなかった。いや、それも僕の思い違いなのか。けれど不安で仕方がない。怖くて仕方がない。

二週間ほど前、五歳になる娘の奈々が僕の背中を指さして言ったのだ。

「だーれ？」と。

全身の皮膚が泡立つ思いだった。あれだけ当然のように目にしてきたものが、いざ自分の背中にもいるのかもしれないと思うと、これほど恐ろしいものなのか。その日から娘に会うのも怖かった。自分の背中にはにわさんがいるという決定的な確信を得てしまうような気がしたのだ。

だが、僕はもう現実から目を背ける訳にはいかなかった。昨晚のことだ。帰宅してリビングに入ると、テレビを見ていた奈々が突然泣きだした。そして「どうしたの？」と抱き抱える妻に彼女は「パパうるさい！ いやあだ」と答えたのだ。もちろん僕は何もしてないし、何も聞こえはしなかった。ただ、その瞬間から記憶の底で思い出したくもない音がずっと鳴っていた。

昨晚、僕はすぐさまそのままにしてある父の部屋を漁った。そして一冊の手帳を見つけた。そこには……県……市……町の寺院のそ

ばで見つかったある防空壕の記述があった。父が初めてはにわさんを背負って帰ってきた時、調査に行っていた戦跡だ。すべての始まりの原因がきつとそこにあるに違いない。

もうすぐ朝の六時になる。僕は一夜をかけてこの手紙をしたためた。荷物はもうまとめてある。

さて、そろそろ行くことにするよ。きつとこれは僕の取り越し苦労に終わるだろう。現実的に考えて、何も起るはずはない。素人にとっては何の面白みもない過去の廃墟を、ただ訪問して帰って来るのが関の山だ。しかしながら、今の僕は何もせずにはいられない。何か、自分を納得されられる材料がなければいても立ってもいられないのだ。

長くなってしまったね。すまない。では、近いうちにまた会おう。

※※※

これが彼の手紙に記されたすべてだ。彼がその後どうなったのか、知り得るのは容易くない。件の防空壕で何かの変異に見舞われたのか。あるいはそこに辿りつく前に、彼の父のように消えてしまったのか。もしかすると、いまだにどこかをさすらっているだけなのか。もしれない。そうであることを願うばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5405/>

はにわさん

2010年10月17日23時23分発行